



わたしはいつも ノートを持って 飛行機に乗り込む

くろきりょう
作家 黒木亮

移動の飛行機の中は日常から
離れた思索の空間である

生まれて初めて日本の外に出たのは、エジプトに留学する27歳のときだった。30歳でロンドンに赴任し、邦銀、証券会社、総合商社で国際金融の仕事に15年半携わった（その間、ベトナムに2年間駐在）。その後、ロンドンに居を構え、そのまま作家専業になり6年が経つ。この間、月に一、二度、仕事や休暇で英国外に出かける生活を続けてきた。これまで訪れた外国の数は76カ国である。国際金融の世界では、欧米流で仕事をする。日本のように、用事もなく出かけていき「こんちわー、いかがですかー？」などとやったりはしない。極力、

電話やテレックス（今では電子メール）で意思疎通をし、取引を締結する。何年取引引しても、声しか知らない相手のほうが多い。最近では、テレビ会議などという便利な設備まで登場した。

それでも出張をするのは、①案件発掘、②交渉の詰め、③関係者が集まって議論する必要がある等の理由による。要は、相手の顔色や息づかいを直接見て、状況を判断したり、解決やビジネスの糸口を探したり、相手を説得したりする必要があったときだ。また、わたしがやっていた国際融資の仕事の場合、現地や現場の状況を自分の目で見ないと、与信判断を誤ることになる。移動の飛行機の中は、今も昔も日常からぼつかり離れた思索の空間である。

金融マン時代、ロンドンのオフィスにいと、顧客から電話がかかってきたり、稟議書を書いたり、社内外の会議や打ち合わせがあったり、人から用事を頼まれたりと、かなり忙しい。時差が9時間（夏は8時間）先の東京の国際審査部と連絡をとったり、5時間遅れのニューヨークの金融機関に電話をしたりしなくてはならないので、早朝に出勤したり、深夜までオフィスで残業したりするのは日常茶飯事だ。

しかし、いったん飛行機に乗ってしまつと、誰からも邪魔されることがない、完全な一人の空間になる。今も昔も飛行機に乗ると、まず、日常から離れて来し方行く末に想いを馳せる。いわば仕事や人生の軌道修正の時間である。それから、地上にいる間に忙しくて読めなかった本や書類に目を通して、思いついたことをノートに書きつけたりする。国際金融マン時代は、映画を観るのもほとんど飛行機の中だった。

デビュー作の緊急着陸のシーンは
実際に体験したことだった

若いころから、本を書きたいと思っていたが、はからずも物書きへの一歩を踏み出したのが、駆け出し国際金融

くろきりょう●北海道生まれ。早稲田大学法学部卒。カイロ・アメリカン大学大学院修士。都銀、証券会社、商社に23年余勤務し、国際金融業務に携わる。代表作に『巨大投資銀行』『トップ・レフト』『エネルギー』『アジアの隼』など。大学時代は箱根駅伝に2年連続出場し、ランナーとしての半生を自伝的長編『冬の喝采』に綴っている。英国在住

マンとして仕事を始めた30歳のころだった。中近東やアフリカの国々を担当していたので、出張は7時間とか10時間といった長距離のフライトが多く、飛行機の中で国際金融の世界で見聞きしたことを、ノートに書きつけるようになり、それが後の作品の糧になった。

たとえば、デビュー作の『トップ・レフト』のラストのほうにある、主人公が乗ったバーレーンからオマーンに向かう飛行機が緊急着陸するシーンは、1989年に実際に自分自身が体験したことである。

夜、バーレーン空港を離陸したガルフエアのトライスター機には、一般の乗客のほかに、英国人の男たち20人くらいと、湾岸諸国でメイドとして働いているサリー姿のスリランカ人女性たち100人以上が乗っていた。英国人の男たちはバーレーンでラグビーの試合をしてオマーンに帰るところらしく、離陸前からビールを飲み始め、離陸後は、ゴミ用の紙袋を頭にかぶって肩を組んで、ラガーマン風の歌を歌っていた。

機は順調に飛行を続け、やがて「あと10分ほどで、着陸します」というアナウンスが流れた。しかしその後、着

陸する気配が全然ないまま、真つ暗闇の中を30分以上飛び続けた。

突然、ピンポンと機内の呼び出し音が甲高く鳴り、アラブ人の男性パイサーらが操縦席に行き、5分ほどで戻ってきた。クルー全員がギャレーに集まり、重苦しい雰囲気ですし合いを始め、やがて大きな目のプラスチック・ボトルに入ったミネラルウォーターを回し飲みし始めた。ヨーロッパ人の女性客室乗務員が一口飲んで、アラブ人の男性パイサーに渡し、アラブ人のパイサーが一口飲み、インド人の女性客室乗務員に渡す。ふと見ると、ヨーロッパ人の女性客室乗務員が天を仰ぎ、胸で十字を切っていた。

「機体のテクニカル・プログラムのため、マスカット（オマーン的首都）には行かず、アブダビ（アラブ首長国連邦の首都）に向かいます」

アナウンスが流れると、隣りにすわった英国人らしい若い男が、「シット！（なんてこった！）」と舌打ちした。

**空港でビールを飲みながら
場面を詳細に書き留めた**

クルーたちは、ガタガタと音を立てながら、機内食や免税品のキャビネッ

トを一斉に片付け始めた。わたしは非常口のそばにすわっていたので、近くの外国人男性二人と、非常口を開ける係やシューターを確実に下ろす係などをやるように頼まれ、アラブ人パイサーから、細かいやり方を教わった。

やがて機は降下を始め、何度か旋回しながら翼のジェット燃料をほぼ空にし、消火剤が撒かれて、赤いランプを点した消防車や救急車が何台も待機している滑走路に向けて着陸態勢に入った。

「ブレース・ダウン・テイル・ザ・プレイン・ストップス！（機が停止するまで緊急着陸姿勢！）ブレース・ダウン・テイル・ザ・プレイン・ストップス！」

目の前のジャンプシートにすわったアラブ人パイサーが音頭をとり、クルーが一斉に唱和を始めた。

（緊急着陸して、こんなふうにするのか……）

両手を頭の後ろで組んで、かがんだ姿勢になりながら、映画でも観ているような気分だった。幸い、飛行機は揺れずに、まっすぐ飛んでいたの、大事故にはならないような予感がしていた。

クルーたちが叫ぶように唱和するな

筆者が出張に出るときの携行品（一部）。パスポートや辞書、ノート以外に、水泳用のパンツとゴーグル、星座板、木の図鑑、文庫本など
写真提供：筆者



か、胴体の車輪が滑走路に触れる軽い衝撃があり、続いて、前輪も問題なく着地した。機は、徐々に速度を落とし、やがて客室内から拍手が沸き起こり、クルーたちは心底ほっとした顔を見合わせた。「テクニカル・プロブラム」というのは、前輪が出ないことだったが、結局、コクピットのインジケーターの不具合だったようだ。他の乗客たちと一緒にバスで空港ビルに向かう途中、点検のために赤い布が前輪に結びつけられているのが見えた。アブダビ空港で、別のオマーン行きの便を待つ間に飲んだビールは、ことのほか美味かった。ビールを飲みながら、いつかこのシーンを使うことがあるのではないだろうかと思って、体験したばかりの場面を、メモ帳に詳細に書き留めた。そのときは、物書きになれる目処めどすらなかったが、その場面は、11年後のデビュー作に格別の臨場感を与えることになった。

命の次に大切な取材ノートやメモは機内持ち込みの鞆に入れる

この話には後日談があり、半年くらい経って、ヨーロッパから湾岸へ向かうアラブ人男性パルサーに再会した。一般にアラブ人は働かないといわれたりするが、緊急着陸時の彼のリーダーシップが見事だったので、印象に残っていた。

「あなた、僕のこと憶えてる？」
わたしが訊くと、彼は怪訝けげんそうな顔をした。

「ほら、半年くらい前にアブダビで緊急着陸したとき、目の前にすわっていた日本人だよ」というと、

「おおーっ！ ナイス・トゥ・シー・ユー・アゲーン！」
と、力一杯手を握ってきた。

出張に行くときは、特別な物は持って行かず、なるべく日常の延長で出かけるようにしている。特別な支度をすると、出発前も出発後も時間をとられるからだ。

20年くらい前から、持って行くべき物60品目くらいをリストアップしたメモを

見ながら、毎回、短時間で荷造りする。人と多少違う物といえば、泳ぐのが好きなので、暖かい国に行くときは、水泳用のパンツとゴーグルを持って行く。

最近では、星座板を買った。世界中のいろいろな場所で美しい星空を見ることが多いが、どれが何の星座かわからなくて、残念な思いをしてきたからだ（ただし、まだ十分に使いこなせていない）。作家になってからは、取材メモに方角を記さなくてはならないことが多いので磁石を、また、木の種類がわからないので、小型の木の図鑑を持ち歩くことが多い。文庫本は、今も昔も旅の友だ。

過去、スーツケースが行方不明になったことが数回あり（幸い、あとで全部出てきた、失くすと取り返しがつかない物は、すべて機内持ち込みにする。パスポートやお金は当然として、それ以外では、書類である）。

作家となった現在、取材相手から聴き取ったり、現地で見たりを書き留めた取材メモは、命の次に大切である。取材に行くたびに、ノートやメモを、愛しい宝物を抱きしめるような気持ちで、機内持ち込みの鞆に入れ、帰りの飛行機に乗っている。☺